

◇ いんたびゅー／五味文彦

「我々のものの見方が変わると分らなかった史料が見えてくる」

◇ 企画展「東へ西へー律令国家を支えた古代東国の人々ー」によせて

◇ <研究余話> 館収蔵の印融資料ー「灌頂集」大巻の収集にあたってー

◇ 収集・収蔵資料の紹介 [15] 高度経済成長期の生活用具

◇ <常設展示室探検> 矢指谷遺跡地層はざとり模型

◇ エントランスホールコンサートを開催しました

◇ ちょっとミュージアムショップたいむ

◇ <知ってますか？> 野焼き

横浜市 歴史博物館 NEWS 14 2002・3



五味文彦

(こみ・ふみひこ)

我々のものの見方が変わると 分からなかった史料が見えてくる

◎歴史に興味をもったのはなぜですか。
中世を専攻した理由は。

大学で文学部を志望しまして、その中で、旅をしながら学問ができる、と聞いて楽しそうだな、と思って歴史学を選びました。入った時は明治維新のころを専攻しようと考えていました。授業では各時代のゼミに出ていたのですが、最初に発表する当番が回ってきたのが中世のゼミ。『吾妻鏡』について調べていて報告したら、教授から「それで？」と次々に聞かれひどい目に遭いました。肝心のことを調べていなかった。それで、自分は何にも知らないんだと分かり、中世の史料について、本気で勉強するようになったのです。

◎初めは政治史を研究していたそうですね。

大学紛争があつて政治への関心が高い時代でしたから、政治の動きをきっちり調べようと思ったのです。その後、社会が変化して、我々のものの見方も変わると、史料の見方も変わっていく。すると、今まで史料の中で分からなかった部分が見えるようになりました。豊かな史料から何かを読み取ろうと働きかけることによって、見えてくるものが変わってきました。



す。読んでゆくうちに、今まで見えなかった史料が見えてくる。

きて、自分が思っていたのと全然違うところが、史料の中から浮かびあがることがあります。そこが歴史学をやっている面白ところですね。

日本文化の源流は中世

◎中世とはどういう時代ですか。

簡単にいえば、古代は国家を形成しようとして中央に権力を集めて、きちんと整ったシステムをつくっていった時代です。やがて、そうしたやり方がうまくいかなかった。維持するためのランニングコストがかかりすぎました。体制を長続きさせるには、中央の権力ではなく、その土地土地に即した経営が必要になってくる。そこから中世が始まったのです。この時代は現地の状況に合わせた勢力に、政治や経済の力が集まるようになりました。

◎中世の文化にはどんな特色がありますか。

大まかにいえば、現代、日本の文化といわれるものの源流が中世の文化です。古代の文化は、基本的には中国大陸の文化を直輸入したようなものです。それを日本の社会の中で受け入れて変化させていった。たとえば『源氏物語』や『枕草子』に流れているような感性は現代につながっています。日本的なものの考え方の軸になるものは、だいたい十一世紀ごろに形成され、お茶や生け花、能、狂言などの芸能はもう少し後の鎌倉後期から末期ぐらいに芽生えました。

絵と歌の両方向から

◎絵巻を使うなど、新しい方法で研究を進められています。それについてお話しください。

中世を考える時、言葉の史料だけでは分からない部分が多に多い。その言葉が絵画ではどのように表現されているか、ということから絵巻に接近するようになったのです。今は、今様という歌謡を集めた『梁塵秘抄』も研究しています。その歌がどういう情景を歌ったものが、その歌がどういう情景を歌ったものか知りたい、となると絵巻の手助けが必要になる。逆に、絵からどういふ歌が流れてくるか、という問いかけも必要になってきます。たとえば、後白河法皇が神社に向いて今様を歌うと、御神体の鏡が輝いた、という話がありますが、絵巻の中でそういう場面を探してゆくと、女性性が石山寺にこもって観音像に祈ると観音が現れる、という図が見つかります。歌から絵を、絵から歌を、という両方向の組み合わせの作業を通じて、当時の

人々の思いのようなものがより鮮明にとらえられるのです。

地域の連帯のために

◎横浜市の文化財保護について。

今、地域の中で、どういう意味があるか分からないまま、古くからあるものが捨てられています。たとえば、小さなほころとか石塔とか。それは地域の条件が変わってきたことのあらわれともいえますが、横浜という大都市でも今後、地域づくりにとって、従来とは違う形での、住民同士の連帯が必要になってくると思うのです。そういう時、過去のものが地域の歴史を考えるためのよりどころになったり、それを探ることで、地域に対するみんなの意識が高まっていく可能性があると思います。そういう意味で文化財は重要なものだから、少なくともどこにどんなものがあるか、それはどういう意味があるのか、という情報を流せる形にしたいと思っています。

◎当館について期待などありますか。

ここに来る方は何か一つ、簡単なことでいいですからテーマを抱いて、発見しようと思つて来てもらおうと有意義になると思います。

▽こみ・ふみひこプロフィール

●一九四六年、山梨県生まれ。東京大学大学院修士課程修了。日本中世史専攻。神戸大学講師、お茶の水女子大学助教授、東京大学助教授などを経て同大学院人文社会科学研究科教授。絵巻物、歌謡などを史料として注目し、多様な史料の多面的な分析を通じて、中世の社会の姿や文化の様相を再現する研究を特色とする。

●著書『院政期社会の研究』（山川出版社）『平家物語、史と説話』（平凡社）『鎌倉と京』（小学館）『吾妻鏡の方法』（平清盛）『金川弘文館』『中世のこころと絵』（中公新書）『藤原定家の時代』（岩波新書）『武士と文士の中世』（東大出版会）『梁塵秘抄のうたと絵』（文春新書）など。

東へ西へ

——律令国家を支えた
古代東国の人々——
によせて

律令という法によって統治された古代

の国家では、一般の人々(百姓)は、調・庸といった物納税、年間六〇日の労働で
ある雑徭などの労役、そして兵役など多
くの負担を課せられました。布などの織
維製品や各地の特産物を納める調、年間
一〇日間の労働か布・米を納める庸は、
物品を納入するだけではなく、それを自
分たちで都まで運ばなければなりません
でした。

奈良の東大寺正倉院には、各国から運
ばれた調・庸の布が残されています。そ
の中に、武蔵国橋本郡橋本郷(現在の川
崎市)の刑部国当が納めた一端の調庸布
をみるができます。布に墨書された
記録から、布は郡の役所である郡家、国
の役所である国府で検査を受け、国の役
人である国司に率いられた百姓たちが都
へと運んでいったことが推定されます。
奈良の都・平城京跡からは、武蔵国・相
模国から納められた各種の物品に付けら
れた荷札木簡をはじめ、全国各地から運
ばれた物品の木簡が数多く発見されてい

ます。これらの物品も調庸布と同じ経過
をたどって都へ運ばれたのです。

また、二一歳から六〇歳の成年男子で
ある正丁三人に一人の割合で兵士が徴発
されました。兵士は各国に置かれた軍団
で訓練を受け、その中から都の守衛に当
たる衛士、西辺防備に従事する防人が選
ばれました。特に防人は東国地域の人々
が担当することになっていたのです。

「わが行きの息衝くしかば足柄の峰延
ほ雲を見とど憊はね」

『万葉集』に載せられた都筑郡の防人
服部於田の歌です。武蔵国の防人は国司
に率いられ、足柄峠を越えて西へ向かい
ました。難波津(大阪市)からは海路で
瀬戸内海を西へ、北九州の大宰府へと赴
いたのです。さらに志岐・対馬に配備さ
れた防人もいたようです。

このように税の運搬や防人としての赴
任など、東国の人々は西への移動を強い
られたのです。その「旅」は無償であり、
特に帰路は辛苦を極めたようです。

ところで、古代の国家は東北地方を



調庸布墨書銘(正倉院御物・宮内庁正倉院事務所写真提供)



郡山遺跡出土の関東系土器

「蝦夷」の地とし、それを領域に取り込
む政策を進めました。それはしばしば
戦争が伴いました。この東北経営・戦争
の人的・物的負担を課せられたのも東国
地域でした。

東北地方の各地には、経営の中心施設
として城柵が置かれました。七世紀中頃
には仙台市南部に役所が置かれ(郡山遺
跡)、大改修を経て八世紀のはじめまで
続きます。ここでは関東地方の技法で作
られた土器(関東系土師器)が出土して

おり、造営や運営への東国の人々の関与
が知られます。八世紀はじめ、東北経営
の拠点として多賀城が造営され、以後、
九世紀の前半までに秋田城(秋田市)・
胆沢城(水沢市)・志波城(盛岡市)な
ど北方へと城柵が造られていきます。多
賀城跡から出土した武蔵国からの米の運
搬を示す木簡、秋田城跡の上総・上野・
下野国に関わる木簡や墨書土器、胆沢城
跡出土の関東系の土器や「上毛野朝臣」
の墨書土器などは、これらの城柵に東国
の人々が深く関わったことを物語ってい
ます。また、東国地域からは多くの人々
が移民(棚戸)として、仙台市以北の地
に送り込まれました。彼らは異郷にムラ
を営み、城柵の造営や運営などにも従事
したのです。古川市をふくむ大崎平野な
どを中心に東北地方から発見される関東
系土師器や関東地方に共通するカマド
は、彼ら移民たちの足跡といえます。

このように、古代東国の人々は、国家
の東北経営のために東へ・北へと移動せ
ざるを得なかったのです。

今回の企画展では、横浜市域にあたる
武蔵国都筑郡・久良郡、相模国に居住し
た人々を中心に、税の運搬のシステム、
防人の旅と実像、東北経営と東国地域と
の関係など、古代東国の人々の東西への
移動の様相を追うことを主題としていま
す。展覧会を通して、古代の横浜地域に
住んだ人々の強いられた遠方への「旅」
に思いをはせてみてください。

◆会期 四月六日(土)～五月二日(日)

(平野卓治)

館収蔵の印融資料

かんじようざつしゅう
「灌頂雑集」六卷の収集にあたって

平成九年（一九九七）秋、当館では印融という戦国時代の真言密教僧の足跡を紹介する展覧会を開催しました。印融は横浜の出身で、高野山や南関東などで活躍した当代希な学僧であったことから、展覧会終了後も、少しずつ関係資料の収集に当たってきました。こうした資料はたとえ江戸時代の写本といっても、そう簡単に収集出来るものではありませんが、今では同時代の写本や活字本など若干ですが館蔵資料の仲間入りをしています。

その中に「灌頂雑集」六卷の写本があります。これには奥書を見ても、印融が書写したなどとは一切出てこないのですが、印融の書写本を江戸時代に書写したものと判断して収集しました。六卷本の内容については、誠に恥ずかしいことですが今後の研究ということにさせていただきます。ここでは、「余話」として、印融の名が一切書かれていない本書を、なぜ、どのように判断して収蔵資料の仲間入りをさせたのか、その部分を簡単に述べてみたいと思います。内容の検討よりはいくらか興味深いのではないのでしょうか。

「灌頂雑集」は、学僧であった印融が生涯をかけて書写した書物の中の一つであることは、展覧会で借用した南区の寶生寺が

所蔵する同書の奥書から分かります。寶生寺本は全六卷の内一・二・六の三卷のみで、三卷から五卷が欠けています。奥書は、第一卷には「永正十七年庚辰二月廿八日写之了。長祐」、第二卷には「永正十七年庚辰三月十日模写之。長祐」とあります。第六卷は奥書部分が破損しており部分的にしか判読できないのですが、冒頭に「永正八年辛未十一月廿八日書写了。印融七十七歳」とあることから、印融が永正八年（一五二一）七十七歳の時に書写したものであることが分かります。またそれを弟子融弁が六十九歳の時書写し、さらに金沢区の龍華寺にあった融弁直筆の本を、長祐が四十五歳の時に書写したことなども読みとれます。

つまり寶生寺本は、印融が永正八年に書写したもので、それを弟子融弁、さらに長祐の書写を経て今日に伝わったものであることが分かります。

では次に、当館で収集した「灌頂雑集」六卷の奥書を見てみましょう。

第一卷には

「永正八年辛未九月廿一日 書写畢
是則為高野住山仙順房之要書也」

持主有任榮泉房
弘治三年丁巳七月廿日 模写之是偏為



上求菩提下化衆生而已

良尊三十六 長淳房

慶長四年己亥五月廿七日求之 快遍

享保十二年七月中旬書写之了

金剛峰寺 諦和 賢深房

とあります。二・三・四・五巻には享保十二年（一七二七）に諦和によって書写されたという奥書のみが書かれています。最後の六巻は少々異なり「本云 永正八年辛

未十一月廿八日 一部六冊書写之 是則為高野住山仙順房之要書也」とあり、最後に享保十二年の諦和が書写した旨の奥書となっています。

寶生寺本と館蔵本とを比べると、第六巻目の奥書の「永正八年辛未十一月廿八日」という年月日が同じのみで、奥書からは館蔵本が印融の書写したものであるかどうか判断ができません。唯一一致する永正八年は、偶然の一致なのかも知れないのです。

つまり「灌頂雜集」という表題は同じでも、至極当然のことですが内容の検討なしでは、これが展覧会で借用した寶生寺本と同本の写本であるのか、また別系統の写本であるのか、印融の書写本であるのか等の判断はつきかねるのです。

では、どこを見て印融書写本であると判断したのかというと、展覧会を御覧いただいた方はすでにお気づきかもしれませんが、それは「是則為高野住山仙順房之要書也」という文言からです。意味は、高野山に住山する仙順房の勉学にとり重要な書物であるから書写したということです。仙順房とは印融の一番弟子の覺融のこと、彼は天文十三年（一五四四）九月十四日に高野山金剛峰寺の第一八七代検校になった僧侶です。印融はこの仙順房のために「十住心広名目」などを始めとして、膨大な数の書物を書写し勉学の助けとすべく送っています。それらの書物の奥書には必ず「是則為高野住山仙順房之要書也」という文言が見えるのです。そしてその脇には「印融」と署名されています。

館蔵本には「是則為高野住山仙順房之要

書也」の文言は見えても「印融」の署名がありません。これは後に書写した人物が書き落としたものと考えられます。このようなことは幾例も見られることですから、もともと印融の署名があったものと考えて差し支えありません。

つまり、館蔵本は紛れもなく、永正八年に印融が高野山で勉学に励む弟子仙順房覺融のために、書写し送った「灌頂雜集」だ

ったのです。それが後世書写し続けられ、最終的には享保十二年に諦和によって書写されたものが当博物館の収蔵資料となったということなのです。

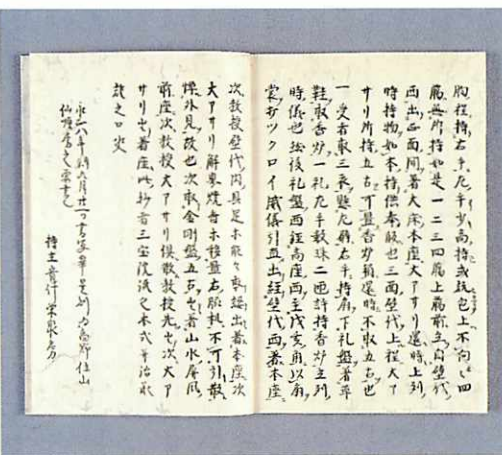
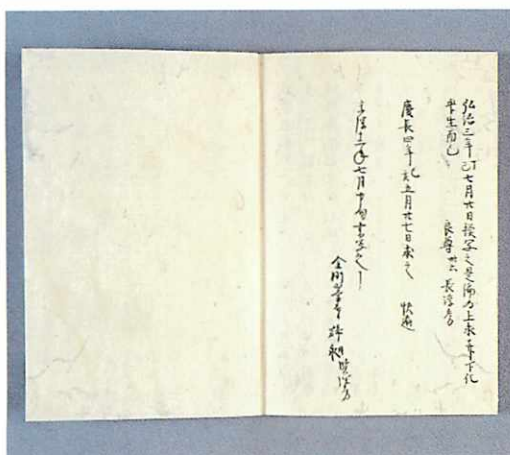
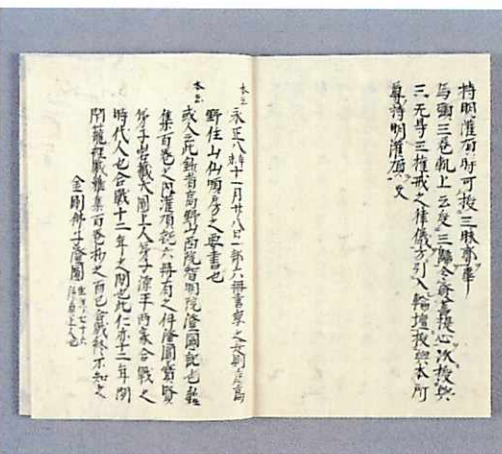
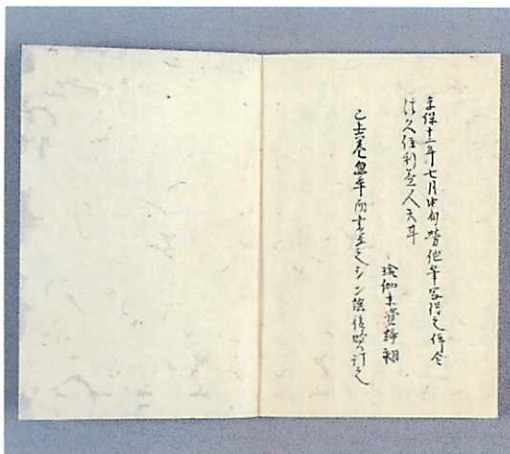
最後にもう一つの文言も注目されます。それは「持主有任榮泉房」とあることです。持主であった有任榮泉房という僧侶の詳しい来歴については不明ですが、高野山光台院所蔵の「悉曇滅罪鈔」の奥書にやはり「持主有任榮泉房」と出てきます。

これは明応七年（一四九八）七月十五日印融が六十四歳の時に書写した自筆本を、天文二十二年（一五五三）九月四日に有任が書写しますが、その記事の脇に書かれています。また有任は同年十月二十一日にも印融自筆本で「悉曇滅罪鈔」の下巻を校合しています。これから、有任が印融自筆本を積極的に書写し、それを所持した人物であったことが分かります。

つまり、「永正八年辛未九月廿一日 書写畢 是則為高野住山仙順房之要書也」の脇に「持主有任榮泉房」とあることは、印融自筆の「灌頂雜集」を書写し所持したものと十分に考えられるのです。

ここにあげた「灌頂雜集」に限らず、典籍などは何人もの手を経て書写され今日に受け継がれています。その奥書を見れば、書写の経過が分かります。本来書写する場合は奥書を含めて忠実に書き写されるのですが、その間に重要な部分を書き落とされたりすることもあります。

幸いに「灌頂雜集」六巻は、数行の文言を手掛かりに印融写本の一つとして館蔵資料に加えられたのです。（遠藤廣昭）



高度経済成長期の生活用具

博物館では、平成一三年一二月からこの三月末日まで、ミニ展示「ちよつと昔を探してみよう」を体験学習室で開催いたしました。

これは、横浜市内の小学校三年生が初めて歴史を学ぶ際の単元「市の人たちのくらしのうつりかわり」をテーマにしたものです。博物館で収集・収蔵しているちやぶ台や茶箆などの家具を配し、衣装箱・薬箱・電気炊飯器・ラジオ・子どもの絵本などを置いて、昭和三〇年代の茶の間を再現したほか、氷で冷やす冷蔵



庫・足踏み式ミシン・たらいと洗濯板・脱水機がついていない電気洗濯機・火のしや炭火アイロンなど、かつてのくらしの道具を展示しました。このほか、ひょうそく・ランプ・電球の明るさを実際に比べたり、石臼で米を挽いて粉を作る体験コーナーも開設し、小学校の学習支援に応えました。

今回展示した生活用具は、全て博物館の収蔵資料です。昭和三〇年代以降、日本は高度経済成長期に入り、くらしのスタイルは大きく変わりました。たとえば、

冷たい水に手をつけて衣類を洗濯板にこすりながら汚れを落とした洗濯は、電気洗濯機の登場によって時間が短縮され、人の手をあかぎれから解放しました。電気洗濯機・電気冷蔵庫・白黒テレビといった「三種の神器」はもちろん、炊飯器などの電化製品の普及は、私たちの家事に費やす時間をだんだんと少なくする代わりに、余暇の時間を増やしてくれました。現在の私たちの営んでいるくらしは、環境問題をはじめとするさまざまな問題を抱えながらも、「便利」で「快適」になったと思います。このようなくらしをもたらし原点となったこれらの生活用具は、くらしの移り変わりを語る上で欠かせない重要な資料といえるでしょう。

博物館ではこれらの資料も集めてきましたが、「三種の神器」など、残念ながらまだまだ収集が十分ではありません。ちよつと昔は当たり前に家庭にあったこれらの生活用具ですが、大量生産の工業製品であったこと、また保存するにも比較的场所をとることなどからほとんどが廃棄されてしまい、いま残るものはきわめて少ない状況だからです。

(刈田 均)

常設展示室探検

矢指谷遺跡地層はぎとり模型

原始―展示室の中央にそり立っているのは、旭区矢指谷遺跡の地層はぎとり模型です。矢指谷遺跡は、病院建設に先立つ発掘調査によって、旧石器時代の石器が三層にわたって発見された遺跡です。二万年以上前に相当する最も古い層からはナイフ型石器など各種の石器が出土しており、これが横浜地域で人々が活動した最古の痕跡なのです。



模型は遺跡からはぎとった実物の地層を右側に配置し、左側にはそれぞれの層がどの時代・年代に相当するのか示しています。また、中央にはそれぞれの地層から発見される遺物を、横浜地域の考古資料の複製品によって模式的に表示しています。

赤土の中に眠るはるか昔の石器から現代の茶碗のかげらに至るまで、地域からは数万年にわたる資料が出土しています。原始展示の最初に、土の中に埋もれた歴史の厚みと深さを実感していただけることでしょう。

エントランスホール コンサートを開催しました。



平成十三年十二月十六日(日)に、第一回目の横浜市歴史博物館エントランスホールコンサート「田口千晴」ピアノの魅力」を開催しました。

当日は、午後二時開演。昼過ぎから参加者の方がぞくぞくと来館され、開場と同時に用意した一三〇席余りの椅子席はあっという間にうまってしまい、急遽、

博物館内の椅子という椅子を総動員して少しでも多くの方々に座って聴いていた。最終的には、四五〇名余りの参加でホールから階段、通路まで人・人・人の大盛況となりました。

奏者の田口千晴さんは、都筑区在住。東京芸術大学・大学院修了。イタリアの

ヴィオッティ国際音楽コンクールで金賞受賞。一九八三年のニューヨークのカルネギーホールでのリサイタルをはじめ、アメリカ各地でリサイタルを開催、帰国後も各地でリサイタル、コンサートを開いています。

今回は、ボランティアでの演奏を快く引き受けていただきました。ショパンのワルツやシューマンのトロイメライなど親しみやすい選曲と、曲の合間には作曲家や曲にまつわるエピソードを判りやすく解説してくださり、参加者の皆さんには演奏とともに大変好評で、二度のアンコールにもこたえていただきました。

このコンサートは、博物館をより身近なものとして利用していただくことの企画から始まった平成十三年度からの新事業です。ポスターや看板、会場の設営などすべて博物館の手作りで行いました。エントランスホールでのコンサートという気軽さもあったか、小さなお子さん連れの方もたくさん来場されており、参加された方々の年齢層も幅広く、都筑・青葉区をはじめとする市内、川崎市、国立市や府中市、中野区など遠方からも来館されていました。初めて博物館に来館された方も多く、いままでも博物館を利用されていない方々に、足を運んでいただけたことも大きな収穫でした。

博物館施設の色々な活用の可能性を模索しつつ、年二回ほどのペースでの開催をめざしています。地域に根ざしたコンサートとして今後も親しんでいただければと考えています。

ちよいと

ミュージアムショップたいむ
Museum Shop Time

自然からの贈り物“草木染め”グッズ

♪バンパカーン！ オリジナル新商品ができたヨォ〜ン。

草木染めのコースターだヨォ〜ン。手作りだヨォ〜ン。

色は、柿の葉で染めた淡い茶色、栗のイガの渋い茶色、背高泡立草(セイタカアワダチソウ)の黄色、白い花をつける車輪梅(シャリンバイ)のかわいらしい桃色など、5種類もあるヨォ〜ン。

染料の草花は博物館のまわりや、都筑区内で採れたものだヨォ〜ン。

コースターの柄は勾玉だヨォ〜ン。一点ずつ手作りだヨォ〜ン。

色も微妙に違うし、数もあまり多くは作れないんだヨォ〜ン。

今後も草木染めでいろんなものを作っていく予定なので、お見逃さないよう、

ミュージアムショップをチェック・チェック・チェックだヨォ〜ン。



草木染めコースター

1枚450円(税別)

5枚セット2150円(税別)

今後の企画展のお知らせ

◎FIFAワールドカップ™関連企画展「ようこそ、歴史の横浜へ」(仮題)

6月1日(土)～7月7日(日)

横浜市の会場になるFIFAワールドカップ™の開催を記念して、当館が収蔵する様々な資料の中から、横浜地域の昔のようすや人々の暮らしぶりを表したものをはじめ、ふだんでは見ることができない文化財を紹介いたします。また、常設展とあわせて、横浜地域の歴史を各地から来た方々にもわかりやすく案内します。

◎企画展「たのしい考古学」(仮題)

7月27日(土)～9月16日(月)

考古学は、数々のめざましい成果をあげて一方で、捏造問題が大きな話題となったように、今や私たちの身近な存在となっています。そこで、考古学とは何か、発掘調査や資料整理はどのように行われているのか、遺跡や出土品の研究で何がわかるのかを、横浜地域の例を中心にしてわかりやすく案内していきます。調査の現場を再現したり、実際に使っている道具を並べると、夏休みにふさわしい楽しい内容になっています。

◎特別展「庶民へのまなざし一浪沢敬三の世界」(仮題)

10月12日(土)～11月24日(日)

日本の資本主義の父と呼ばれる浪沢栄一を祖父とし、政財界で活躍した浪沢敬三は、一方で庶民のくらしに強い関心を持ち、民俗学や民具学などの分野で大きな業績を残しました。そこで行われた資料の収集・保存・活用方法は、現在の博物館や文化財保護の考え方に結びついています。本展では、さまざまな記録や収集した資料から、その研究の視点を明らかにするとともに、活動の足跡をたどっていきます。

???????知ってますか???????

野 焼 き

当館では、土器作り教室や体験学習で作った土器や土偶を焼成(野焼き)して受講者にお渡ししています。この行事は3月、8月、11月の年3回、中旬から下旬にかけての日曜日に、大塚・歳勝土遺跡公園の体験広場で行います(日程はお問い合わせください)。同時に土器作り教室修了者でつくる「横浜縄文土器づくりの会」が土器を焼いています。



当日は、朝から野焼きの場所作り、まき運びから始めて11時頃にいよいよ点火。長さ約9メートルになる焼成床に、おき火を作った土器をならべます。熱さに耐えながら周囲にまきを積むと、土器は炎につつまれ、土器は色を刻々と変化させながら焼き上がります。

夕方には体験学習で作った土偶も焼き上がります。自分の作った土偶がどんな風に焼き上がるのか、子どもたちは興味津々です。野焼きの見学は自由です。お昼頃には複製した縄文土器を使って作ったアサリのスープが味わえる、かも知れません。

(2001年10月1日～2002年3月31日)

- 10月5日 歴史講座「古文書解読教室」(12月7日まで連続10回)
- 10月6・7日 体験学習「土偶づくり」
- 10月25日 <ふるさと横浜探検4>保土ヶ谷宿周辺の史跡散歩
- 10月27日 東海道宿駅制度400年記念企画展「東海道と保土ヶ谷宿」開催(11月25日まで)
- 11月3日 都筑・青葉区民まつり出店参加
- 11月4日 企画展関連研究講座「保土ヶ谷宿の成立」
- 11月10・11日 体験学習「まがたまづくり」
- 11月11日 企画展関連研究講座「保土ヶ谷宿の浮世絵を読む」
- 11月29日 <ふるさと横浜探検5>国史跡称名寺境内から野島を歩く
- 12月4日 東海道宿駅制度400年記念企画展「東海道双六の世界」・新指定文化財展開催(12月23日まで)
- 12月8・9日 体験学習「風つくり」
- 12月16日 第1回エントランスホールコンサート「田口千晴一ピアノの魅力」
- 12月26・27日 全館燻蒸のため臨時休館
- 1月23日 歴史講座「古代史講読講座」(2月20日まで連続5回)
- 1月26日 企画展「中世の棟札一神と仏と人々の信仰」(3月3日まで)
- 1月26・27日 体験学習「紙すき」
- 2月3日 開館7周年記念特別講演会 五味文彦「鎌倉時代の東国の文化」
- 2月17日 歴史講座「土器づくり教室」(3月24日まで計4回)
- 2月21日 インターンシップ(社会研修)受入れ(フェリス学院大学生4名、3月3日まで)
- 3月16・17日 センター北まつり出店参加
- 3月28日 <ふるさと横浜探検6>国指定史跡長浜城址と葦山周辺の歴史散歩

横浜市歴史博物館 ● 日誌

横浜歴史博物館ニュース読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をお寄せ下さい。お寄せ下さった方にプレゼントをさしあげます。はがきに、①お名前②ご住所③年齢④このニュースを手にした場所⑤ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館読者プレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。締切りは2002年6月30日です。ご応募いただいた方の中から抽選で10名様に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルグッズをさしあげます。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
都筑民家園
毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

編集後記

エントランスホールではじめてコンサートを行いました。階段から通路まで観客でいっぱいになり、シンパインやリストのメロデーに博物館が包まれました。幸いにも多くのお客様が来館され、楽しんでいただけたようです。次回は七月に開催する予定です。ぜひご参加下さい。

